

わしの名は乾地蔵、年は 350 歳をこえる大年寄りじゃ。

わしが若かった頃は、今とは違ってこの辺りは「乾村」と呼ばれておってなあ、
周りは見渡す限り田んぼや畑だったんじゃ。

わしはその頃から住んでいるから「乾のお地蔵さん」と呼ばれるようになったんじ
ゃ。

今までこの村の中を अच्छこっち引越したんじゃよ。

今日はその話をしようじゃないか。

．．． 裏

昔は今と違って道が土でできておってなあ、雨が降るとすぐに水溜りができたんじや。

田んぼの水があふれたりすると、あぜ道が水につかってなあ。

その後にできた水溜りには、帰りそびれたメダカなんかもおったんじや。

．．． 裏

昔の村人達は、あぜ道を大八車をひいて行ったり来たりしてたもんじゃ。

大八車の通った後は草が生えてこないもんだから、その両脇の草を結んで歩いている人を引っ掛けては子ども達は大喜びしてたなあ。

いつの時代も子どもはいたずら好き、わしはいたずらっこが大好きじゃ。

・・・ 裏

村人達は毎日いろいろな物をお供えしてくれたもんじゃない。

中でもわしの大好物はなんといってもお餅とにぎり飯。

そんなわしの好物をよく供えに来てくれる大男がおったんじゃない。

その大男は気がやさしくて力持ちで、お釜いっぱいの大根飯をぺろりとたいらげて
しまうほどの大ぐらいだったんじゃない。

でも自分の分もわしに分けてくれる、そんな大男が大好きじゃった。

「なあおまえさん、わしをこの村の入口までつれて行ってくれんかのう。

そこで村に悪い病気が入ってこないように見張ったり、旅の安全や村人達の幸せを
見守りたいんじゃないが」

「うひゃあー、じっ地蔵がしゃべったー」

．．． 裏

それから何日かして、やさしい大男が重たいわしを「よっこらどっこいうんとこさ、大事な大事なお地蔵さん」と歌いながら、一人で村の入口まで運んでくれたんじや。

．．． 裏

村の入口に着いてみると、それはそれは寸派なお堂が建っておったんじゃ。

そのお堂は大男から話を聞いた村人達がわしのために作ってくれた物じゃった。

それはそれは居心地のいいお堂じゃった。

それからわしが村を見守り続けていくつもの季節が過ぎた。

その間この村には悪いこともなく、村人達もみんな楽しく過ごしておったんじゃ。

・・・ 裏

そんなある日、村の入口に新しい家が建つことになってしもうたんじゃ。

そこで大男に「ここにはもう住めないようじゃ、どこかいい所はないかのう。」と尋ねてみたんじゃ。

すると大男は「そんならお地蔵様、わしの家の近くにちょうどいい場所があるからそこへきなされ。」と言ってすぐに村の中へ連れて行ってくれたんじゃ。

．．． 裏

村の中では、子供達の間で大正けんぱという石蹴りが流行っておってなあ、学校帰りにわしの前に集まりよく遊んだもんじゃ。

このころは、今ほどたくさん家はなく、それぞれの家にも塀などはなかったもんだから、子供達は村中を駆け回ってかくれんぼなんかもやっておったのう。

・・・ 裏

そんな間にも、毎日のように新しい家や工場やお店がどんどん建って行ってなあ、
あっという間に、にぎやかな町になっていったんじゃ。

・・・ 裏

ある日、大男がやって来て、「お地蔵様、ここにも大きな道路ができることになって
しもうたんじゃ。

村の外になら広い場所があるんじゃがどうかのう。」と聞いてくれたんじゃ。

しかしなあ、この村から離れるなんてわしにはとても寂しくて悲しいことじゃっ
た。

そこで大男に「みんなと一緒にいられるのなら、大切なこのお堂がなくてもかまわ
ない。なんとかこの村の中でわしがいられる場所を探してはもらえんじゃるか。」と
泣いて頼んでみたんじゃ。

そうしたらなんとかわし一人がおれるくらいの場所が見つかってなあ。

そりゃ嬉しくてのう。

．．． 裏

今は親切な人のおうちのそばで、大切にしてもらっているんじゃよ。

この辺りはすっかり変わってしまったけれど、雨がかからないように屋根はあるし、道行く人々は気軽に声をかけてくれるので、住み慣れたこの土地でわしはとても幸せなんじゃ。

これでこの話はおしまい。

これからも大好きなこの町で、みんなのしあわせを見守っていくからな。